

今号は、特別展「箱根火山」にちなんで、箱根の動物や植物に関する記事を集めます。

箱根を越えた西洋の博物学者 —箱根の自然史研究のはじまり—

かつやまてるお
勝山輝男 (学芸員)

17世紀から18世紀にかけて、箱根は日本の自然史研究の重要な舞台の一つとなりました。当時、ヨーロッパでは博物学がさかんになり、やがてリネー（リンネ）の分類学により、自然史の研究は近代的な自然科学へと脱皮します。一方、日本は江戸幕府の鎖国政策により、中国とオランダ以外の外国との外交や通商をいっさい禁じていました。入国を許された外国人は長崎の出島に隔離され、国内を自由に移動することもできません。オランダ商館長の江戸参府は外国人が日本国内を旅行する唯一のチャンスでした。江戸参府に同行することができたのは、商館長と書記と医師の3名に限られました。ヨーロッパの博物学者や植物学者で、当時の日本に足跡を残したケンペル、ツェンペリー、シーボルトもオランダ商館の医師として来日し、江戸参府の機会に箱根を越えました。長崎から江戸への道中といえども、自由に歩かまわれることはできず、しかも、山陽道・東海道という重要な街道を通るため、沿道はよく整備され、本来の日本の自然に接することはできません。彼らを満足させるような自然景観は、標高1,000mの山地を通る箱根だけでした。

ケンペル Engelbert Kaempfer (1651-1716) はドイツ人の医師・博物学者・旅行家で、1690年（元禄3年）に来日し、1691年と1692年の2回、江戸参府に随行し、同年10月に離日しました。1回目の参府では3月11日に三島から箱根を越えて小田原に泊まり、このときにハコネソウ（ハコネシダ）を見えています。帰りは4月7日に箱根を越えました。翌年は往路は3月29日、復路は4月29日に箱根を越えました。

帰国後、ケンペルは1712年に、*Amoenitatum Exoticarum Politico-physico-medicae* 「廻国奇観」を著し、その第5巻で日本の植物を多数紹介しました。ケンペルが来日したのはリネーの「植物の種」(1753) 以前のため、これらの植物の学名の命名者にはなっていません。

ケンペルの没後、1723年に *The History of Japan* 「日本誌」が出版され、鎖国時代の日本を知る貴重な資料

としてヨーロッパで広く読まれました。江戸参府の部分では、前述のハコネグサのほか、芦ノ湖の魚類や逆さ杉について記録しています。魚類は *Salmons* と *Strobmling* と記述されていますが、前者はヤマメまたはアマゴ、後者はウグイと考えられています。

ツェンペリー Carl Peter Thunberg (1743-1828) は、スウェーデン人の医師・植物学者で、1775年（安永4年）に来日し、1778年に離日しました。ツェンペリーはリネーの弟子で、来日の目的は日本の植物を採集することでした。1776年に江戸参府に随行し、往路は4月25日、復路は5月27日に箱根を越え、多数の植物を採集しました。

帰国後、植物に関しては、*Flora Japonica* 「日本植物誌」(1784) をまとめ、日本産の植物812種を記録し、多くの新種を記載しました。箱根産植物は69種が掲載され、長崎産の約300種に次ぐ数です。箱根を基準産地として新種記載されたものはクロモジ、マルバウツギ、マメザクラ、コウゾリナ、ゼンマイなど30種にのぼります。

また、ヨーロッパを発って帰国するまでを4巻の旅行記(1788-1793)に著し、そのうちの日本旅行記の部分が「ツェンベルグの日本紀行」として知られています。この中には日本の動物や鉱物も記録されました。鉱物については箱根の記述はありませんが、動物では

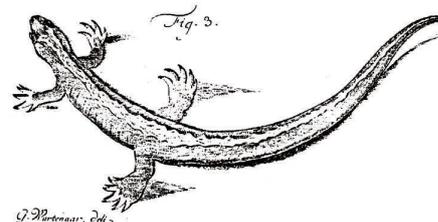


図2 ホットアイン Houttuyn のハコネサンショウウオ。

Iammanco という赤い鱈の魚（おそらくウグイ：瀬能学芸員談）とサンショウウオを記録しています。サンショウウオは標本が持ち帰られ、スウェーデンのウプサラ大学に保管されているそうです。ハコネサンショウウオの学名は *Onychodactylus japonicus* (Houttuyn) で、1782年に記載された *Salamandra japonica* Houttuyn に基づきます。*Salamandra japonica* の基準標本は所在不明ですが、ツェンペリーの持ち帰ったハコネサンショウウオの標本が用いられた可能性があるそうです。

シーボルト Philipp Franz von Siebold (1796-1866) はドイツ人の医師、植物・動物・人類・民族学者で、やはり出島の商館付き医師として1823年（寛政8年）に来日、1829年（文政12年）に離日しました。1826年4月7日に往路、5月22日に復路、箱根を越えています。帰国後ツッカーニーとの共著で *Flora Japonica* 「日本植物誌」(1835-1870)、テミンクとの共著で *Fauna Japonica* 「日本動物誌」(1833-1842) が出版されました。シーボルトは6年間日本に滞在し、植物、動物、鉱物などの標本を多数持ち帰っています。ヤマボウシのようにシーボルトが持ち帰った箱根産標本に基づいて命名された植物もありますが、日本人の弟子や本草学者が日本各地で採集した標本を入手することができたため、ツェンペリーと比べて箱根に関する比重はそれほど大きくありません。

ペリーが来航し、鎖国が解けると、開港地横浜から近い箱根には多くの外国人研究者が訪れ、やがて、明治時代になると日本人による、自然史研究のフィールドにもなりました。特に植物では、箱根ではじめて採集され基準産地になったものが多くあり、学名や和名に箱根の名のつくものもたくさんあります。



図1 ツェンペリー *Flora Japonica* のクロモジ。